

接続詞

沖 裕子

A 解説

1. 接続詞とは

事柄と事柄の関係を明らかにするために、話し手の態度を述べる語詞である。接続詞の説明は、阪倉(1974:239-248)が、明瞭簡潔に述べているので、以下に要約して示す。

接続詞は辞である

「電車が動く。」「人が走っている。」という二つの文があるとする。この二つをまとめて、連続的に表現しようとするれば、

電車が動き、人が走っている。

というように、先の文の述語「動く」を中止形にすればよい。しかし、これをもし、

電車が動くので、人が走っている。

電車が動くのに、人が走っている。

というように表現すれば、ここには、話し手の態度が付け加えて表現されている。そういう主体的な判断が、「ので」と「のに」という辞によって表現されている。これを、

電車が動く。だから人が走っている。

電車が動く。それに人が走っている。

と表現した場合にも、「だから」「それに」という語の表現しているものは、何らかの事柄に関するのではなくて、辞と同じく、話し手の態度や立場であることが分かる。「だから」や「それに」がなくても、「電車が動く」「人が走っている」は意味の上で接続しうるし、語勢やイントネーションで、先のような気持ちを表すこともできる。ただ、これをはっきり示す「だから」「それに」「そして」というような表現が付け加えられることによって、接続関係が一層明瞭になる。

二つの独立する「文」が接続する場合に限らず、単語と単語の連続、文節・連文

接続詞

節、ないしは従属節や対立節の接続の場合でも、同じことがいえる。

ノート及び本

滞納も又は延納も認めない。

講義のノート並びに適当な参考書を持参してもよい。

意味を考え、あるいは用例を調べた上でなければ、結論が出せない。

雨が降っていたし、その上風もひどかった。

水心あればすなわち魚心あり。

接続詞のなりたち

接続詞は、本来は他の品詞に属していた語が、その大部分だと言ってよいほど多い。たとえば、接続詞の「また」は、副詞の「また」と深い関係がある。陳述副詞の「もっとも」などは、元来「もっとも安くはあるが、品がよくない」というように、「安くはある」ということを一往認めて「品がよくない」に対して注釈的に付け加える言い方であった。それが、さきに「品がよくない」と述べたあとで、すぐ断り書きとして「もっとも安くはある」と付け加えて述べられ、「但し」と同じような性格を持つようになって、だんだん接続詞として固定したのだと考えられる。(参考・渡辺実「陳述副詞の機能」『国語国文』昭和24年4月号)

接続詞とは、つねにそれに先立つ叙述を必要として、これを受けているものである。受ける概念内容がはっきりしているものから、概念内容が希薄になったものまで、さまざまある。

ちょうどそこに棒切れが落ちていた。それで泥棒に一撃をくらわせた。という場合の「それ」は、明らかに棒切れをさす代名詞であって、「一撃をくらわせた」という述語の副詞的修飾語になっている。しかし、

突然彼がなぐりかかった。それで僕も対抗上、彼に一撃をくらわせた。という場合の「それ」が、本来は代名詞であったことの名残はあるが、この場合もはや「それ」と「で」とに分解して考えることはできなくなっている。「それで」で、一つの接続詞と見るべきものである。これは、

突然彼がなぐりかかった。で、僕も・・・
というように表現することもできる。つまり、影のうすくなった本来の詞の部分をふりすててしまっ、実質的な辞だけが残った形である。

接続詞の機能

接続詞は、上記のような性質を持つところから、さきの文を受けて後の文の展開をはかる上で、重要な役割を果たす。

接続詞は、中世以後の日本語ににわかに多く用いられるようになったが、これを用いることによって、話し手(筆者)の考え方、論理の進め方がはっきり表面に出てき

て、読者がこれについていくことが容易になる。

しかし、接続詞が多いということは、文を冗漫な、重厚味のないものにもする。接続詞が省略されていることで、聞き手(読者)は、たえず緊張しながら話し手(筆者)の論理の展開を追わざるをえなくなる。また、それがすぎれば、ひとりよがりな、きざな文章になる。

2. 日本方言の接続詞

2.1 話し言葉における接続詞研究

接続詞の研究は、主として書き言葉を対象として進められてきており、話し言葉を資料とした接続詞研究はまだ盛んであるとはいいがたい。日本方言における接続詞の研究も本格的にはこれからの課題であるといつてよいであろう。

方言における接続詞の研究は、地理的変異を追究する側面と、一言語における体系と運用を追究する側面があるが、離れたものではない。両者あいまって、日本方言の実態を明らかにするものである。

接続詞は、語彙的事実、文法的事実であるとともに、談話(や文章)の展開において一定の役割を果たしている。談話は、話し言葉であり、実際の話し言葉は標準・非標準を問わず、すべて方言(地域語)で実現されることに鑑みれば、方言学の知識なくして、真の談話研究は遂行されないことになる。

2.2 国語史と日本方言史の側面から

接続詞は、中世以来、日本語の論理的運用の進展とともに発達をみてきた。日本方言の分岐・統合を研究する観点からいえば、比較的新しい現象に属する。テンス・アスペクトのような言語の根幹にかかわる現象で、日本語の古層を追究しうるような事象とは、その意味で性格が異なっているといえよう。

G A Jによれば、接続詞にも地域的な分布が認められる。国語史という観点からみれば、接続詞の研究は、方言区画、それも中世以降の社会の分化のあり方を反映する文法項目としてこれを位置づけ、研究してみる必要があるであろうと思われる。

3. 調査の着眼点

接続詞の共時的な研究は、これからの課題である。条件表現における接続助詞とどのように接続詞は異なるのか、どの程度分離して独立した語詞になっているかについても不明である。まず、自分自身で当該の方言談話を収録・文字化して、そこで使用されている接続詞の特徴について観察することから始めてみる必要がある。接続詞は、語彙的、文法的、談話的事実であるから、それらに配慮した分析を行う必要がある。

また、通時的な研究にとっては、接続詞の形態的な分布状況を把握することも必要であ

ろう。『方言文法全国地図』によって、接続助詞および若干の接続詞の分布を見ることができ。たとえば、ダカラという接続詞は、指定辞ダと、接続助詞カラとから成る。＜指定辞+接続助詞＞という語構成からなる接続詞には、ダカラ、ジャカラの分布がみられるが、「*ヤカラ」はみあたらない。指定辞ヤを含む接続詞は＜ソ系指示語（ソ・ソン・ホンなど）+指定辞+接続助詞＞という語構成になることが知られる。（以上小西(2000)参照）『方言文法全国地図』に収められている接続詞の数自体が少ないので、現在刊行されている方言談話資料などにあたるなどして、まずは、当該地域でどのような接続詞がどのように使用されているか網羅し、分布地図もあわせて作成していく努力が要求される。

4. 研究の現状と発展

接続詞の意味・機能に関する研究は、共通語の文章を資料としたものが最も進んでいるが、分類については諸説あり、定説をみない。接続助詞との連続性の問題や、談話における働きを考察しなければ結論がつかない部分を有しているからであろう。話し言葉における接続詞研究については、シナリオなどのテキストを用いるか、あるいは内省による研究が多く、話し言葉資料に立脚した研究は少ない。話し言葉は、方言として実現されるため、地域差を含んだことばの総体を観察する方言学の知見が要求される。方言研究者の意欲な参加が望まれる領域であろう。

文献

- 沖 裕子「対話型接続詞における省略の機能と逆接 「だって」と「なぜなら」「でも」」
中條修編『論集 言葉と教育』和泉書院
- 沖 裕子「新用法からみた対話型接続詞「だって」の性格」『人文科学論集』第31号 信州大学人文学部
- 久木田恵(1990)「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162
- 小西いずみ「東京方言が他地域方言に与える影響 関西若年層によるダカラの受容を例として」『日本語研究』第20号 東京都立大学 国語学研究室
- 坂原茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会
- 阪倉篤義(1974)『改稿 日本文法の話 第三版』教育出版
- 鈴木一彦・林巨樹編(1973)『品詞別 日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院
- 鈴木一彦・林巨樹(1984)『研究資料日本文法 第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院
- 時枝誠記(1950)『日本文法 口語編』岩波書店
- 永野賢(1959)『学校文法 文章論』朝倉書店

接続詞

蓮沼昭子(1993)「対話における「だから」の機能」『姫路独協大学外国語学部紀要』第4号

蓮沼昭子(1995)「談話接続語「だって」について」『姫路独協大学外国語学部紀要』第8号

森岡健二(1994)『日本文法体系論』明治書院

森重敏(1970)『日本文法通論』風間書房

山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館

渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房